

論文

内務大臣副島種臣と第三議會

齋 藤 洋 子*

はじめに

明治25年3月11日、副島種臣は第一次松方正義内閣の内務大臣に就任した。衆議院議員であった尾崎行雄は、後年副島の内相就任について次のように述懐している〔尾崎 1951: 184〕。

松方内閣が品川子に代へて副島伯を内務大臣としたのは、成功であつた。副島伯は人も知る忠誠篤厚の士で、当世稀にみる人格者として、一世の信望をあつめた人であつた。憲政の新知には通じてゐなくても、伯には漢学から味ひ得た王道論があつた。民と親しみ民を導くをもつて自分の任となし、暴虐な压迫手段や、卑劣な節操売買は、大さきひな人であつた

明治24年5月6日、山県有朋内閣の後を受けて発足した第一次松方内閣は、成立直後の5月11日には大津事件が生じるなど、当初から波乱の幕開けとなった。迎えた第二議會では予算審議をめぐって紛糾し、内閣は解散を決断した。これを受けて翌25年2月15日、第二回総選挙が実施されたが、この選挙をめぐり地方官と民党との抗争は、各地で死傷者を出す流血の惨事となった。選挙後は選挙干渉をめぐり、陸奥宗光農商大臣、後藤象二郎通信大臣等政府内部から

も品川弥二郎内相の責任を追及する声が生じ、3月2日、品川は辞意を表明した。これを受けて政府は後任人事に着手し、井上馨、河野敏謙、副島の名が候補として挙がった。そして、3月11日副島は第一次松方内閣の内務大臣に就任した。しかし、わずか3ヶ月で副島は内相を辞任したのである。

さて、第三議會を扱った研究には、林〔1948abcd, 1949a〕、佐々木〔1992: 147-280〕等がある。こうした先行研究でも、内相時代の副島の動向に就いて言及されてはいるが、未だ不明な点も少なくない。

まず、なぜ副島が品川の後任候補として浮上したのかという疑問である。明治6年10月征韓論に破れて廟堂を去って以来約18年間、当局者として政治にあたることがなかった副島が、品川の後任候補として浮上したことは如何にも唐突という印象を免れない。丸山〔1936: 303-304〕は、副島の内相就任について、選挙干渉の後始末に苦慮した松方内閣が「国民の激昂を緩和するために、一大の人格者として国民に尊敬せらる」副島を無理やり引き出したと記している。しかし、国民の尊敬を集める人物が副島唯一であったとは考え難い。一方佐々木〔1992: 230〕

* 早稲田大学大学院社会科学研究所 博士後期課程3年（指導教員 島 善高）

は、河野と副島を比較した松方の判断については論証しているが、副島が内相の後任候補に浮上した経緯についての記述はない。

次に、副島は如何なる境地で内務大臣就任を承諾したのであろうかという疑問である。管見の及ぶ限りでは、この時の副島の心境について考察したものは見当たらない。

最後に、副島の描いた政策論とはどのような内容であったのであろうか。内相就任後は議会対策に迫られ、副島が自身の描く政策を披瀝する場面はほとんどなかったが、心中には長年温めた意見も有していたことであろう。

以上のような疑問点に立脚し、本稿では、明治25年の副島の内務大臣就任をめぐる経緯及び背景を明らかにするとともに、当時副島が描いた政治的主張を考察することとしたい。

1. 副島の内務大臣就任とその背景

1-1. 枢密院副議長へ就任

副島はなぜ内相候補として浮上したのであろうか。この点を考察するにあたっては、まず、当時副島がどのような立場にあったのかを確認しておく必要がある。

明治6年10月征韓論争に破れて野に下った副島が、翌7年1月に板垣退助、江藤新平等と共に民選議院設立建白書を提出したことは周知のとおりである。政府は、副島等辞職した征韓派を御用滞在の名目で東京に留め置いた。しかし、特別に仕事もなくただ僅かな俸禄を与えられて留め置かれる毎日が愉快なはずはない。副島は再三にわたり賜暇願を提出し、9年9月によりやく御用滞在が免じられると、同年秋から11年春に掛け2度に渡って清国漫遊に出かけている。帰国から約1年後の12年4月、副島は宮

内省御用掛兼一等侍講に就任した。その後、19年2月の宮内省官制改革に伴い宮中顧問官へと転じ、21年4月には枢密院設立と同時に顧問官に任じられた⁽¹⁾。

24年9月10日、副島は病気の寺島宗則に代って枢密院副議長へ就任した。その翌日、伊東巳代治は伊藤博文宛に「昨日副島伯本院副議長に被任、寺島伯は顧問官に被任候。副島伯は尤も歓喜被致居候に付、別封札状被差出候事に御座候」と書き送っている[伊藤 1974: 138]。伊東の弁からは、議長の伊藤が副島の副議長就任を容認していたと推察される。

この副議長就任は、副島と松方内閣の関係に影響を与えることとなった。最大の要因は、伊藤が東京を離れていたことである。24年9月上旬から10月上旬まで伊藤は萩へ帰省し、旧藩主毛利敬親の記念事業に尽力した。そして10月中旬に小田原に帰ったのも束の間、11月14日、旧藩主の銅像建立基金募集のためとして再度山口へ下ったのである[春畝公追頌会 1942: 790-791]。伊藤が再び山口へ向かったのは、松方内閣に対する不満の表れであった。

10月22日、松方内閣で深刻な問題となっていた覆牒変更問題について伊藤、井上、山県、松方による元勲会議が開かれた。ここでいう覆牒とは第一次山県内閣において衆議院予算査定案に対して提出された回答書であり、同問題については、佐々木[1992: 170-182]に詳しい。

伊藤は松方内閣を援助するつもりで乗り出したが、却って内務省系各紙の攻撃を受け憤慨し、再度帰郷したのである⁽²⁾。そして、帰京後も小田原に引籠っていた。

伊藤が東京不在の間、枢密院と内閣間の調整は副島を介して行われた。内閣は壮士処分の法

案を議決し、枢密院の議に付するために、10月8日には副島に謀り同意を得た。これより先「弥々枢府の議に付するためには如何せは最も穩に通過すべきや」と尋ねた陸奥に対して、伊東は「刻下議長不在中に候へば、先づ副島副議長に面し、其の止むへからざる所を相談被成候外有之間布」と答えている〔伊藤 1974: 146-148〕。また、12月12日永田町官舎が出火した際も、副島はすぐさま参内し、宿直の侍従にその次第を言上した後現場を訪ねた。事後処理及び官舎再築にも積極的に関与している〔伊藤 1974: 163-164〕。こうした副島の行動も伊藤不在に依るところが大きいと考えられる。

以上のように、枢密院副議長就任は、副島と松方内閣の関係を緊密にしたと言えよう。

1-2. 第二回総選挙と佐賀

伊東は、「先般選挙準備之折、副島伯九州行之事内閣より懇望せられたりとて態々官舎へ相談に被参候節も、小生伏蔵なく愚見申陳竟に内閣之所望に应せしめさりし事は内々内閣へも相聞へ居候由」と、松方内閣が2月に実施した第二回総選挙に際し、副島を九州に派遣する意向があったことを報じている〔伊藤 1974: 188-189〕。なぜ、内閣は副島の九州行きを懇望したのであろうか。

第二回総選挙では、板垣、大隈重信の出身地である高知、佐賀は選挙干渉により大きな犠牲を出したが、佐賀における選挙干渉の黒幕は松方内閣で文部大臣の座にあった大木喬任であったという〔佐賀市史 1978: 452-453〕。佐賀の乱に少年隊として参加し、晩年貴族院議員となった古賀廉造は、往時を振り返り、「当時の内務大臣は品川弥二郎であつて其干渉の方面に当つた

が、其実はこの干渉事件は大木伯が發起人である」と、語った⁽³⁾。

他方、第二回総選挙で議員生涯唯一の落選を経験した武富時敏も〔渋谷 1934: 130-132〕、

時の内閣に伴食の一員たる大木伯は自己の出身地から政府党議員を出して、手柄顔をしたいばかりに、非常に奮発をしたものである。如何なる非法を為しても構はぬ。後日の責は総て自分が負ふから、何としても反対党の挙らぬ様にせよ、と地方官に内命したので、さなきだに政府の趣意が干渉に在る上に、県地出身の大臣がソウ云ふ意気込みなれば、地方官は朝敵征伐の気になつて仕舞つた

と、選挙干渉の背後には、大木の指示があったと記している。古賀や武富の弁を額面どおりに信じることはできないが、現存する史料からも大木が郷里佐賀の選挙動向に深く関与していたと考えられる⁽⁴⁾。その他、当時の佐賀の状況を窺うに格好の史料として、小城郡郡長を勤めた石井晋一が残した『衆議院議員総選挙ニ就テノ始末』がある〔石井 1973〕。

本県ハ佐賀、肥筑ノ両派ニ岐レ、佐賀派ハ国民的自由主義ヲ執リ、肥筑派ハ純然タル自由改進黨ヲ執ルモ、第一期帝國議會ニ改進黨、自由ノ連衡ヨリ九州改進黨ナルモノト変シ、遂ニ民党二名ヲ挙グルニ至タリ、而シテ今日ニ於ケル両派ノ勢力ヲ比較スルニ肥筑派ハ非常ノ勢力ヲ有シ…県治上万般ノ政務ニ容喙シ誠ニ不都合ナリ

佐賀、肥筑の二派とは、前者は佐賀新聞を、後者は肥筑日報を機関紙にする二派であった。両派は明治14、5年においては、共に佐賀開進会のメンバーに名を連ねていたが、市制実施をめぐる意見が対立し、国会開設前に町制派の人々は武富を中心に分派し「郷党会」を結成し、肥筑日報を機関紙とした〔佐賀市史 1978: 383-426〕。第一回総選挙では、武富、松田正久等郷

公会派が当選したため、佐賀県下の肥筑派優勢は圧倒的であった。官吏であった石井は、民党優勢の佐賀政界を、「徒ラニ民力休養ヲ口実ニ藉リ、県政ヲ妨ケ…人心ヲ動乱セシムルノ基礎ヲ形造ルモノト思料」していた。そして「此ノ大挙ニ乗ジ、民心ノ意向ヲ一変」するため「必死ノ覚悟ヲ以テ当タルコトヲ決意」した。

官側が最も重要視したのは佐賀一区であった。「然ルニ右二、三区ノ代議士ヲ再選シタリトテ、国家ノ為メ憂フルニ足ラザルヲモ、第一区ノ前代議士松田、武富ヲ排斥スルニ非サレバ、到底総選挙ノ目的ヲ達シ能ハザルヲ以テ、是非トモ之ヲ排斥センコトヲ企図」したが、なかなか適当な人物が見つからなかった。そして「遂ニ牛島秀一郎、阪元規貞ノ兩人ニ定」まった。石井の記述は、佐賀において武富、松田の勢力が如何に大きかったかを物語っている。

ところで、官側が武富等の対抗馬として擁立した一人である坂元規貞とは、嘉永5年北川副村新郷の生まれで、藩校弘道館に学び、後に木原隆忠が主宰した木原塾で塾頭を務めた人物である。明治9年12月長崎県十五等出仕を拝命し、20年には文部属となったが25年第2回総選挙に際し、官を罷め立候補した〔旧肥前 1993: 154-155〕。明治大学博物館蔵『大木喬任文書』に、興味深い史料が残っている⁽⁵⁾。

坂元運動費ノ事、小子之ヲ明言シテ必ス遣スベシト申シタルニ非ラス、副島ヨリ旅費シ渡シ呉レロト申サレタルマテナリ、副島ト如何ナル約束アリシヤハ知ラス、坂元発途ニ臨ンテ運動費モ入ルナルベシト申サレタルニ、夫レハ実地ニ臨ンテ吾方ニ被申ヨト副島被申タリ、坂元モ貧生ノ由ナレバ素リ運動費ハサテヲキ宿泊所モ又持在ラレサルハ明ナリ、何連ヨリ歟之ヲ補ハサレバ相成ラサルハ亦明ナリ、県ニ於テ已ニ坂元ヲ利用シタル上ハ県ノ持チト思惟セリ、

然レ共カク迄ニ成リタル上ニ是レニテ負クル様ナ事ニテハ相成ラス、兎角勝敗ノ決セサル内ニ何トカ決スル事必要ナリ、左ナクンバ誰レモ知ラスト云ニ至ル事アルベシ

上記文書は、日付、宛名、署名がないと同時に、所々修正が加えられていることから、大木の書翰案であったと考えられる。文面からは、選挙に対する大木の断固たる意思が見て取れると同時に、詳細は不明なものの、副島が坂元への選挙資金援助を申し出ていたことが窺える。

高嶋は、25年1月10日付け松方宛書翰に「扱、佐賀之模様も、大木、副島君杯之御高配ニ依リ、頗ル面白状況ヲ呈シ、見込相立候様御座候、付而は、御困難ノ段、御察仕候得共、爰ニ貳千圓斗、大木君へ御振向被下ましくや」と記している〔大久保 1987: 430〕。石井も「一月初メ頃ニ至ルマデハ、肥筑派ハ佐賀派ノ運動ヲ豪モ憂慮スルニ足ラズトテ、恬然顧リミズ侮笑シツツアリ…一月十日頃ニ至リテハ形勢激変シタルヲ以テ忽チ狼狽シ、頻リニ武富、松田、天野等ノ帰県ヲ促スニ至レリ」と記しており、高嶋が書翰で伝えた佐賀の形勢と内容も時間も一致する。

さらに、1月5日付『鎮西日報』には⁽⁶⁾、

大木文部大臣、副島枢密院副議長は何れも佐賀県出身の元老なるが、両伯は此度衆議院解散は全く近來人心の腐敗して徒らに政治熱に浮かされ神聖なる帝國議會を以て勢力競争の具と為せし結果なる事を痛く慷慨せられ、今回の選挙にはせめては故郷なる佐賀県からは帝國代議士に愧ざる尽忠愛国の名士を挙げしめんとて内々憂慮せられ居るとの事なれば、時宜に依ては副島伯は久々にて祖先の墓参旁々帰省せらるやに言伝ふるものあれども事実如何にや

と、副島帰県の風聞が掲載されている。松方内閣が副島に九州行きを懇望したことを報じた伊

東書翰は、その明確な日時には触れていないが、『鎮西日報』掲載記事から推察すれば、24年末から25年年頭にかけてであったのではないだろうか。伊東の進言も手伝ってか、副島の九州行きは実現しなかったが、1月10日には既に佐賀政界の状況は変化しつつあった。高嶋の「大木、副島君杯之御高配ニ依り」という言葉からは、佐賀政界の状況変化の背景に、副島の影響があったと推察することができよう。

第二回総選挙における副島の言動を検討することは全く今後の課題であり、現時点で指摘できることは、副島が坂元へ選挙資金の援助を申し出ていることのみであるけれども、坂元が吏党候補であること、更に高嶋書翰を考え合わせると、副島の言動は松方内閣にとって好ましいものであったと言えるであろう。そして、この事実もまた、副島が内相候補に挙げられた遠因となったと言えるのではないだろうか。

1-3. 内相就任の受諾

副島への内相打診が、どの時点で開始されたのかは明らかではない。3月2日、品川の辞意表明により、後任人事が問題となった。4日に松方は、伊藤へ井上馨の内相起用を諮り賛成を得た。これを受けて、5日には黒田が、7日には伊藤が井上へ説得を試みたが、承諾を得ることはできなかった〔佐々木 1992: 228-230〕。その一方で、3月5日に高嶋は「品川は到底思ひ止る処万々六ヶ敷、後任は副島、河野適当奉存候。左候は、知事連中も折合出来、将来は却而良結果を得可申敷。井上伯は少々今日の人気に對し不都合歟存申候」と、松方に進言した〔大久保 1987: 428-429〕。では、副島はどの時点で就任を承諾したのであるだろうか。

3月10日、井上は「添島は昨夜承諾候由に御坐候」と語った〔伊藤 1973: 289〕。しかし11日、伊東は昨夜の顛末を伊藤に報じている〔伊藤 1974: 188-189〕。これによれば、10日夜、大木邸で松方、大木、副島の三者が会談している最中に、大木から呼出された伊東は、松方から「副島伯へ内務大臣後任之事相談に及候処中々承知不相成、幾重にも大木伯と共に勸告之末、到底老兄（小生を指す）に相談之上可相決との事に有之、何分至急を要する次第も有之候に付態々呼寄たり」と告げられた。そして、副島、大木からも意見を求められたので、「第一聖慮如何、第二内閣一統の折合如何、第三自身の厚薄如何」と尋ねたところ、松方は「逐一弁明」した。

前節において、第二回総選挙前に政府から九州行きの要請を請けた副島が、相談のため伊東を訪問したことを示したが、この時期副島は伊東に少なからぬ信頼を寄せていたようである。『蒼海全集』には「贈伊東枢密書記官長」と題した詩が収録されている〔副島 2004: 301〕。伊東が枢密院書記官長であったのは、22年5月から25年8月であることから、この時期の両者の関係を窺い知ることができる。伊藤の欧州憲法調査に随行し、初期議会下では伊藤の手足となって行動した伊東が、当時副島と親密な交際をしていたという事実は注目に値する。両者の関係を検証することは、同時期の副島の動向を探る上で重要な手がかりとなることであろう。

さて伊東書翰からは、まず、副島が10日の時点で未だ内相就任を完全には承諾していない様子が窺える。先の井上書翰と考え合わせるならば、副島は受諾の方向で考えつつも、迷いもあったのであろう。しかし、翌11日午後3時には親任式が挙行されている。いかに切迫した状

況であったかが見て取れよう。

書翰中、注目すべきもう一点は、伊東と松方のやりとりである。伊東は「聖慮」「内閣一統の折合」「自身の厚薄」を、副島が内相を引き受けるにあたっての必要条件として列挙したところ、松方は「逐一弁明」したという。しかし、天皇は副島の起用に難色を示していた。

枢密顧問官の佐々木高行は25年3月19日の日記に以下のように記している〔佐々木高行〕。

御沙汰に、此度副島を内務大臣に任候儀自分不可然と相考候、其訳は同人も最早老年にもあり何事も十分の働き出来間敷、若し不都合と相成辞表差出候時は枢密院に帰り候事も場合に依りては相調間敷、愈民間に下り候ハゞ又々不平を申出、奇人に候得ば、谷干城杯と同様の地位に立ち又々内閣も心配増し可申と申したれども、松方より今日他に無之と申出たり、河野の方なれば若くもあり出来可申と考たれども何分副島に被 仰付旨にてありし、他日山県が陸奥を採用して困りたる轍を踏ぬ様に注意すべしと申たり

天皇の語ったところが、佐々木の記した言葉のとおりであったか否かはさておき、天皇が副島の内相就任に強い懸念を示していたことは間違いない。天皇は副島が野に下る事態が生じれば、谷同様の道を辿りかねないと案じた。谷は、第一次伊藤内閣の農商務大臣に任じられたが、伊藤内閣の欧化主義政策に反対し、条約改正問題をめぐって辞任した。そして帝国議会開会後は貴族院議員となり藩閥政府と対峙していた。天皇の懸念は、これまでの副島の言動に起因していたと推察される。

12年4月の侍講就任以来、副島の身边は常に騒がしかった。侍講就任から半年後の12年9月前後には、進講中政府の政略を批判し、且つリゼンドルと往復し清国との談判に対して外国新

聞紙上で評論したとして、黒田清隆を中心とする政府の一部が副島罷免を訴えた〔元田・海後1969:190-197、齋藤2006a〕。13年春には、副島自身が病を理由に辞職を願い出、御宸翰を賜ったことはよく知られている。14年秋に生じた北海道官有物払下事件に際しては、有栖川宮熾仁親王・大隈宛に薩長政府を批判し人事一新を訴えた激烈な建白書を提出し、15年3月には再度辞職を願い出た〔齋藤2006b〕。16年春には、地券改正、官民調和の旨趣を以て九州遊説を上奏した〔齋藤2006c〕。そして22年には、元田永孚、佐々木、谷等と共に大隈条約改正交渉に反対した。

こうした問題が生じる度に、天皇は副島の立場を案じたが、宸意を受けて副島を庇護し、その行動を制御したのは元田であった。しかし、もはや元田はこの世にはなかった⁽⁷⁾。

副島の門弟でもあった古賀〔1976:9-18〕は、内相就任は大木の力に依るところが大きいので大木に挨拶に言っただろうかと副島に進言したところ、「先生は大いに怒って『僕の大臣たるは大木輩の力をもって能くすべきに非ず、天子の命令によって然るなり』と云われた」と語っている。やはり、天皇の叡慮は副島に伝わっていただけなのであろう。尤も、就任を要請しているという状況を考慮すれば、松方が天皇の意見を伏せていたことは当然とも考えられる。

かくして副島は、3月11日に内務大臣に任命された。その前日、徳大寺実則は、「品川内務大臣病ヲ以職ヲ辞ス、後任副島伯種臣被任何アリ、次ハ河野敏謙、次ハ総理大臣兼任カ」と日記に記している〔徳大寺〕。伊東が「小生之挨拶に而副島伯も断然承諾の意を表せられ、尚後事杯話出され候次第に有之候」と語っているよう

に、10日夜の松方・大木・副島・伊東の四者会談は、副島の内相就任承諾への最後の一押しとなったと言っても過言ではないであろう。

2. 第三議會開始前の副島内相

2-1. 副島の「議會談」

副島は内相就任に際してどのような抱負を抱いていたのであろうか。任命の翌日に取材に訪れた記者に対し、「余の就職は世人も意外なるべきが、余に取りては一層意外の就任にて、昨日御請を致したばかりの今日、別段に申し出すこともなく「余は唯だ丹誠以て国に奉することを常に心懸け、今後とても別段彼是と新工夫を持出すほどの了簡はなし」と答えている。品川の後を自分が襲うことになるとは、よもや考えていなかったものであろうから、「丹誠以て国に奉する」のみとは、偽らざる心境であったであろう。そして、焦眉の課題である選挙干渉処分問題と議会对策については、特別な方策を示さず、あくまで「公平」に処するという信条に終始した⁽⁸⁾。しかし、3月20日には次のような議會談を披瀝している⁽⁹⁾。

今日の我日本ハ代議制国としてハ実に創業の時代なり、故に今の民間政治家中にハ准壯士とも云ふべき無職業の空論家多し、此内にハ一日も早く責任内閣を組織し政府の役人となりて生活を立てんとの野心を抱く者なきにしも非ず、一昨年来の議会在無益に喧騒を極めたるハ蓋し之れが為めなるべし、英国の如きハ責任内閣の張本国なれども我國の如く無職業の空論家を代議士に挙ぐるの弊なし、凡そ眞の代議制国に空論的政治家のあらう筈なし、然るに今日我國に此流の政治家あるハ創業時代にして国民一般が未だ代議政治の妙用を知らざるが為めなり、故に政府が国家の福利を増進するに必要と認めて発したる議案を議會に於て妄りに否決する時ハ、政府ハ飽迄も強硬主義を取り用捨なく何回にてもドシ、解散

を命ずるの覚悟なかる可らず、英国に於て創めて憲法を実施せし時政府と議會の意見甚しく衝突して三回迄解散を命じたれども、三回目に至りて結局政府ハ予算なきに窮して遂に議會と譲り合ひ和睦せしことありしが、日本の憲法にハ予算不成立の時ハ前年度の予算を施行する明文あるを於て何回解散を命ずるも大なる差支なし、此の如くして改選十数回に及ば、大に代議士の面目を改むべし、現に今回の臨時選挙の結果を第一期の選挙の結果に比すれば世間一体に幾分か空論的政治家を忌むの傾きあり、要するに今日無益の喧騒を極むるハ代議制度の進行する階梯と諦らむるの外なし

こうした副島の意見は、先に紹介した1月5日付けの『鎮西日報』記事と相通じるものと言えるであろう。

イギリスと異なり、日本は予算不成立の場合には前年度予算を採用すると規定されているので、議會が国家経営に必要な議案を妄りに否決するのであれば、何度でも解散すべし、というのが副島の意見であった。つまり副島は、第二議會の紛糾の責任は民党側にあり、松方内閣の解散という決断を是としていたと考えられる。

副島の議會談は一見強硬な意見にも思えるが、言うまでもなく、議會制度を否定したものではない。代議員は国民の代表であるから己の利のために政治にたずさわるのではなく、国家福祉増進のために尽くすべきであると、代議制度の本質を説いているのである。副島から見れば、議會が国家経営に必要な議案を妄りに否決し紛糾を極めることなどは「無益」に他ならなかった。そして、この「無益な喧騒」をどうにか抑えようと行動していくのである。

2-2. 板垣訪問とその反響

尾崎行雄は、内相就任後の副島について次のように述懐している [尾崎 1951: 184]。

大隈侯とは、同郷のよしみもあり、また民選議院設立の建白以来、板垣伯とも交はりがあつたので、この人が内相となるとすぐ、しばしば大隈侯や板垣侯と面談して、政府と民党との融和につとめた。このやうなことは真率なる副島伯にして、初めてよくするところであつた。

従来、幾つかの研究において、副島が内相就任後、板垣、大隈と会談したと記されている⁶⁰。

事実、4月9日副島は板垣を訪問した。この時の模様は新聞各紙に掲載され、両者の会談内容は明らかではないとしながらも、副島は、

官民相反目すること今日の如くして進み行かば国家の前途に於て頗る憂ふべきものあり、爾來政事上重要な問題に就ては余は飽迄も足下の意見を叩くべし、去れば国民民福を増進する点に於て余と足下と意見を全く相反するときは止む、出来限り互に相提携せんと欲す、離合の岐るゝ所は只国家の利害に関する意見の衝突にある而已、足下以て如何となすと

と語り、板垣も「そは余の最も希望する所なり、爾來相往來して旧交を煖め与に至誠を以て国事に執掌すべし」と応じたと報じられた⁶¹。

副島の板垣訪問は、次は大隈との対談があるのではとの臆測を呼んだ。14日付の新聞各紙は、昨日副島が大隈に一書を投じ面会を求めたと報じた⁶²。しかし大木は、同日付の松方宛書翰に次のように記している〔大久保 1987: 119-120〕。

昨夜純九郎ヲ呼出候得共、一時比まで不罷出、脇方へ罷出候よしニ付、同人ニ申遣シ、問合可申命候処、同人只今出頭、新聞之一件の如キハ、已ニ朝日新聞ニ掲載有之ヨリ、昨夜已に佐賀議員、亦今日同人等ヨリ副島へ詰論致候よしニ付、副島ハ断シテ右様之事ハ不致、板垣、谷等ニ面会致シタルハ、少々方策も有之タル事ナレトモ、近来大隈之挙動ニ就而ハ、素り絶交同断之事ニ就き、決而右様之事ハ無之ト明言被致候よしニ御座候

冒頭の「純九郎」とは佐賀出身で、副島の門弟であつた中村純九郎であろう⁶³。14日の紙面に掲載されたということは、13日中には副島が大隈に一書を寄せ面会を申し込んだという情報が新聞社に入っていたと考えられる。一方、同夜純九郎を呼出し、真偽を確認しようとしていることから、大木もまた同日中にはその情報を得ていたのであろう。副島が情報を否定したことで、大木は「彼の党の奸策」（恐らく改進黨を指しているのであろう）か、「新聞の都合」で報じられた虚説であろうと結論付けている。

翌15日の紙面には、副島は「未だ嘗て大隈伯に書を送りたることもなく又面会を求めたることもなし」と、前日の記事を否定する内容が掲載されている⁶⁴。板垣の訪問直後、副島が大隈に面会を求めたという記事は誤報であつた。この事実のみで、副島内相が官民融和のため板垣、大隈に面会したとする従来の記述を否定することはできないが、現時点では副島内相と大隈の会談を示す史料には遭遇していない。

ところで、先の大木書翰によれば、副島は「近来大隈之挙動ニ就而ハ、素り絶交同断之事ニ就き、決而右様之事ハ無之ト明言被致候よしニ御座候」と大隈との会談を到底考えられないと強烈に否定している。

副島が板垣、大隈と会合を持つのではないかという噂は、既に3月下旬には生じており、その真偽を確かめに訪れた記者に対し副島は次のように応じている⁶⁵。

大隈と云ひ板垣と云ひ維新の際ハ俱に王事に勤勞し薪に臥し胆を嘗め艱難を同うせし旧友なれば、今日の如く互に障壁を設けて其交を絶つが如き觀あるハ素より余の本意にあらざれば、時機を得て一堂の中に相会し各自の胸臆を打明しなば互に意見の在る

所も分明なるべく、大丈夫の世に処する宜しく公明正大なるべし、何ぞ秘密と陰険とを要すべき、併し此事ハ余が或人と一場の茶話になしたる迄にて未だ公然両伯に向て申込しことハあらざるなり

会談の申込みという巷での噂は否定したもの、その意志は十分に有していたようである。大隈、板垣は苦勞を共にした仲間であるから、相会し膝を交えるならば必ずやお互いに理解し合えるだろうとしている。恐らく、これが副島の真意であったのではないだろうか。そうであるならば、大木書翰中で大隈との会合をあれほどまでに激しい言葉で否定したのは何故であろうか。

ところで、副島と板垣の会談の仲介をしたのは、誰だろう、武富と共に郷党会から佐賀一区に出馬し、坂元、牛島の前に敗戦を喫した松田正久であった⁴⁰。前述したように、第二回総選挙で副島は、吏党候補坂元に資金援助を申し出ていた。その選挙からわずか2ヶ月余りで、今度は民主党候補であった松田の仲介を入れて板垣と面会したのである。

そもそも副島は、武富とも決して浅い関係ではなかった。14年に組織された佐賀開進会主義書は副島の口述であり、武富は同会の中心メンバーであった。のみならず、14年の政変の際、親類諸岡孔一を使いとして同志を糾合しようとした副島の求めに応じ、武富は上京している[渋谷 1934: 106-107]。佐賀市史 [1978: 426]によれば、その後の佐賀政界の政派対立は複雑であったというが、こうした県下の動きに副島がどのような反応を見せていたのかは明らかではない。しかし、第二回総選挙において坂元に示した好意は、大木が佐賀政界に抱いた感情とは趣を異にしていたのではないだろうか。

先の松方宛書翰の文面からは、大木は副島の板垣、谷訪問についても全く知らされていないと推定される。そして、書翰中「詰論」という言葉を使用していることから、副島、大隈会談への強い反発が窺える。民党の存在に否定的であった大木にとって、内相である副島が民党の党首と会談するなどという行為は理解しがたかったのであろう。

大木からの問い合わせに対して、大隈との会合を強く否定したのは、副島の大木への配慮によるものか、大木、副島両者に師事していた中村が機転を利かせたものか、或いは大木が松方に対して副島を弁明するためであったのか、現時点ではその真相は明らかにし得ない。しかし、副島の板垣訪問に対する反響は、話し合いによる官民調和路線を目指す副島と、あくまでも民党勢力を排除しようとする大木との議会運営、引いては議会制度に対する認識の相違が如実に現れた結果とも言えるのではないだろうか。

2-3. 選挙干渉と地方官処分問題

議会開催後、民党側が選挙干渉に関与した地方官の処分を声高に要求してくるであろうことは容易に想像された。内務省の所管となるこの問題に対し、副島はどのような対策を考えていたのであろうか。就任直後の取材に対しては⁴¹、

選挙干渉の問題に付ては、果して其の事実あるやなしやすら未だ判然せざれば世人の噂が如何に喧しければとて余より進みて其の実否を調査するにも及ふまじ、言はゞ別段是と云ふほどの證跡なき限りは内閣に於ても先づ其の事実なしと断するの外あるまじ、扱て又た品川子が其の任を退き余が其の後を承けたるをば右の噂に関するもの、如く思ひ政府の対議会の一なりとまで言ふ人もあるが是も意外の推了

にて余に於ては右の噂に対し毫も策略を行ふの念あらす

と答えていたが、それから約半月後の3月27日に再び干渉問題について意見を求められると、

官吏が職権を濫用し暴力若くハ賄賂を用ひて選挙に干渉するの非なる事ハ固より論を俟たざれども、官吏と雖も一面にハ臣民の資格を有し居る故一己の資格を以て国家の爲めに自己の信ずる代議士を挙ぐる事を勧誘するが如きハ敢て差支なき事なり、過般の総選挙ハ世上一般に競争の熱度非常に上騰し人心殆ど狂したる如き有様故、数多の官吏中にハ政府の意思を奉じ過ぎたる輩なきを保し難し、若し法律に触れたる者あらバ夫々処分する迄の事なり

と、より具体的な意見を述べている⁽⁹⁾。

佐々木 [1992: 241-252] によれば、副島は選挙干渉に関与した地方官の更迭処分を企図し、河野農商相もこれに同調した。副島の動きに激しく反発した白根は、議会開会後の5月15日付けで松方に意見書を提出し、「其初メ任ニ就クヤ、地方官ニ対シ、余ハ前任品川大臣ト主義ヲ同クスル者也ト明言シナカラ、其後ノ所為ヲ熟察スルニ言行相反スル者少ナカラス」と副島を非難し、内相解任を訴えた。

確かに副島は、就任の翌日内務省に出頭し、上京中の各府県知事に向って「内務施政の方針に至りては前大臣品川子が執られたる方針に寸毫の差なき」と演説した⁽⁹⁾。白根にすれば、当初は前任者の方針を踏襲すると言っておきながら、後に選挙干渉に関与した地方官処分を企図することは、背信行為と映ったのであろう。

一方、副島にしてみれば自分が前言を翻したという認識は皆無であったであろう。副島の選挙干渉に関する意見は前述のとおりで、前者では、証拠がない以上干渉は無かったと判断せざるを得ないとし、後者では、「法律に触れたる者

あらバ夫々処分する迄の事なり」と明白に語っている。つまり「前大臣品川子が執られたる方針に寸毫の差なき」という副島の言葉は、選挙干渉に関与した地方官僚を一切黙認することを意味しているわけではない。そもそも政府は選挙干渉の事実認定自体を否定していたのであるから、干渉の事実があったと証明されるならば、「品川の方針」も変わって当然という理屈であったのであろう。

こうした、副島と白根の見解の相違は、議会開催後その運営をめぐる一層対立を深めていくこととなった。

3. 第三議会と副島内相の辞任

3-1. 議会停会

第三議会が開始されると、選挙干渉問題をめぐって審議は紛糾した。5月12日、河野広中等は「選挙干渉ニ関スル上奏案」を衆議院本会議に上程し内閣の退陣を求めた。この上奏案は辛うじて3票差で否決されたが、14日、中村弥六により再度政府の退陣を求めて提出された「選挙干渉ニ関スル決議案」は、43票差を以って可決された [内閣官報局 1979a]。

ところで、河野等が提出した上奏案をめぐり議会が紛糾した際、忽然と登壇した副島がただ一言「維戎維狄」と発したというエピソードは、副島内相を語る際必ず添えられてきた。

ザワ、とした議場はシンとなつて、三百人の眼は白髪白髯、巨眼巨耳、掃溜に鶴の下りたやうな異相異風の先生に注がれ、如何なる言が吐かれるかと咳一つせず聴耳を立てた。先生は双手を組み、双肩を揺がし、唯一語、雷の如き大音声に「維戎維狄」と叫んだ。書経の一句が選挙干渉の答弁になつたのである。殆ど大抵のものは何のことやら判らぬ。呆氣に取られてる間に、先生は悠然として壇を下つた。先

生の誠意がしかも満場の諒とする所となつたのは、固より人格の力である。二大民党の首領たる板垣も、大隈も、先生とは個人的にも親しい間柄であるから、議會の猛者も、先生に対しては鋒鋦を藏めたのであつた。

と、あたかも眼前に光景を髣髴とさせる筆致で記している[丸山 1936: 305]。ところが、衆議院議事録を見る限りこの副島発言は収録されていない[内閣官報局 1979a]。もちろん、議事録は全ての発言を収録しているわけではないし、あまりにも抽象的な副島のこの発言は削除されたとも考えられる。しかし、当時の新聞各紙を紐解いてみても、このエピソードは見当たらない。この議會で副島は都合5回演説をしているが[内閣官報局、1979a, b]、各紙は一連の議事録だけでなく、「副島内務の演説」等と題してその都度感想を附して報じている。もし副島が審議の混乱した議會で、唯一語「維戎維狄」と叫んだのであれば、当然大きく報じられているはずである。丸山が内相時代の副島を執筆するにあたって引用した林田[1927]には、副島の議場演説に関するくだりはない。したがって、この有名な副島発言の真偽には疑義を呈せざるを得ない。

さて、選挙干渉をめぐり審議が紛糾した間、政府はただ手を拱いて傍観していたわけではない。13日、箕浦勝人他4名が提出した新聞紙法案が衆議院を通過した。主たる改正内容は、1) 発行届出期日の短縮、2) 保証金全廃、3) 行政処分による発行禁止の撤廃、の3点であった[内閣 1979: 94-99]。14日に政府は、同案を基本的に容認することを一旦決定した。政府、自由党間には、集会・新聞・出版の三条例が貴族院の協賛を得られるならば、政府はこれを認可

し、濃尾震災事件については再調査をする、自由党は震災予算外支出事後承諾問題を握り潰すという約束ができていた。しかし、所管官庁であった内務省の白根等の反対に遭い潰れている。この時白根は「終ニハ副島大臣ノ言行を非難」したという[佐々木 1992: 251]。そして翌15日、白根が松方に意見書を送り副島の解任を求めたことは前述したとおりである。

この時の政府と自由党との交渉過程は明らかではない。佐々木[1992: 252-254]は、副島辞職後、板垣が日下義雄に「三条例(言論・集会・出版)等を通過を此の議會に而政府も内諾し其の報酬に余り過激之運動は不為事に内約有之候処、添島の辞職に而不被行事に相成後悔致居候」と語ったことから、議會前、副島が「少し方策も有之」として板垣と会談した際、「政府攻撃の緩和を条件に言論・集会・出版の規制緩和を内約した」のではないかと指摘している。

辞職から半年後の25年12月、第四議會で再び提出された新聞紙改正案について意見を求められた副島は、次のように答えている⁸⁰。

条例は改正せざるべからず、停止せざるべからず、我が内務にあるの頃なりき、南海の新聞紙過激の言論を為し郡長可殺の説を為す、知県電音以て我に発行停止を命ずべきやを問ふ、我之に答へて曰く、停止に及ばず、之を停止したればとて一旦頒布したる新聞紙は驕も舌に及ばず、何の益かあらん、如かず郡長を殺さんとする者を警察の力を持って予防するにはと、我の在職や短日月にてはありたれども発行停止を命じたるは単に一回なりと覚ふ、是れ停止の効用なきを知ればなり、然れども新聞紙時として治安に妨害ある説を為すことあり、是れ政治を為す者の放棄すべからざる者なれば今の新聞紙郵送税を減じ悉く郵便配達となし、治安妨害と見認らるゝ者は其紙のみの頒布を禁ずる様致たし

内務大臣として副島がどれほどの譲歩を示し

ていたのかその詳細は明らかではない。しかし、民党の提出する改正案と同意見を有していたわけではなかったようである。

さて、第三議会であるが、14日の「選挙干渉ニ関スル決議案」可決決議は、法的拘束力を持たなかったが、危機感を抱いた政府は16日、一週間の停会を実施した。

3-2. 議会再開と副島内相の辞職

最終的に、濃尾震災救済予算外支出事後承諾問題を廻って、副島と白根の対立は決定的となった。

24年10月28日岐阜愛知両県下をマグニチュード8.0という大地震が襲い、死者は7200人を数えた。政府は、既に岐阜愛知両県下震災救済及河川堤防工事費として225万円を予算外支出し、その事後承諾案を第二議会に提出した。しかし、解散により決定を見なかったため、再度第三議会に提出した。同案は特別委員会に付議されていたが、24日に財源上の問題と工事内容の不透明を理由に不承認の見込みとなった。この事態に政府は、板垣や星亨衆議院議長に働きかけ、被災地の再調査を条件に審議未了による事後承諾案否決回避をとりつけた。これを受け副島は、31日の議会で被災地再調査の間審議延期を求める演説を行なう予定であった。しかし、これを探知した白根と小松原英太郎が抗議のため自宅に籠居したため、副島の演説は中止となった。白根等内務官僚の専横に対し、後藤、河野から白根解任の声が挙がった。

一方、自由党との妥協は政府に協力的であった温和派を刺激した。6月2日登院した副島は、「前後撞着の演説を遣らん」として松方に遮られ、自宅に引き籠った。温和派の反発はいよいよ

よ高まり、松方に副島解任を迫った。内外からの攻撃に対し、松方は高嶋、西郷、品川と協議し「副島伯に辞表を差出さしめ候より外無之」との結論に達した。6月8日の辞表受理により、副島は内務大臣を辞職した〔林 1948c, 升味 1966: 206-209, 佐々木 1992: 252-254〕。

6月5日、副島は辞職を申し出たが慰留され、それに応じたが、同日中に今度は政府から辞職を求められた。この間の事情を伊東は詳細に報じている²⁰⁾。6月2日演説を遮られ自宅に引籠もった副島は、5日朝辞職を申し出た。これを受けてまず河野が、その後伊東も説得にあたった結果どうにか了解をとりつけた。

しかし、その間に温和派は政府が自由党と妥協交渉を行った事を憤り、内務大臣解任を強く迫ったため、西郷、品川、高嶋等は相談の結果「到底副島伯に辞表を差出さしめ候より外無之」と、伊東に副島の説得を依頼した。伊東は4ヶ条を挙げ、承諾が得られるならば副島を訪ねても良いと条件をつけた。この4ヶ条の内2ヶ条は副島が辞職後、枢密顧問官に復帰することを約束した内容であった。西郷等は伊東の条件を即刻了承した。

松方も、「内閣の議を以て辞職を勧むる訳には不参候へとも、勢ひ辞表不被差出ては相纏不申」と、大木に副島への友誼上の忠告を懇願した。大木からも「自分の使としても是非副島へ申勸呉候」と依頼された伊東は、再度副島邸へ向かった。話を聞いた副島は、快諾して伊東に辞表案作成を依頼したという。その後副島自署の辞表が提出され、直ちに上奏された²¹⁾。辞職後の副島については、伊東の条件のみならず、御内意も枢密顧問官転任にあったため²²⁾、内相免官と同時に顧問官に任じられた。

6月5日、伊東が内相留任の説得の為に訪問した際、副島はこれまでの経緯を語った²⁴⁾。

今度自由党と内談の事は素より自分の発意にあらず、高嶋子等自由党の一派と内話の末後藤伯に移し、而して総理を初め各大臣相談の末愈決行すべき事と相成、後藤伯の紹介に依り星とも面談し種々取極、愈演説を試んとするに際し総理より差止められ、跡にて聞けば御味方連中に異論を生じ為其閣議約変するに至り、後藤伯は自分が総理の説に随ひ折角の計画を執行せざりしを優柔不断なりと罵り、他の閣臣等は知らぬ顔の半兵衛を気取り、御味方議員の御機嫌を損せん事を虞れ前議を翻し演説思ひ止り呉との依頼なれとも、既に星とも相談済の上突然中止する訳にも不参、旁以病氣に付辞職すへしとの書翰を星に送り、当日は直と官邸に引取りたる次第なれば、此事たる初より自分一己の発意に無之、総理を始め一同熟慮の上決行せんとしたるに、今日に於ては自分一身の所為なるか如く申触され残念至極なれとも、為国家相忍候より外無之

伊東は、副島の弁は自分の聞いている話とも大差がないとしている。5月30日、白根は「内務大臣ハ一身ニ反对党之攻撃ヲ受ケ、為閣下ニ尽スヘキ時ト存候処、副嶋伯ハ毫モ其意思無之、却而反对党之言ヲ妄信シ、又ハ一場之演舌モ不致、唯タ反对党之氣ニ入ル様心懸ラレ候様相見ヘ、驚入申候」として再度副島の解任を求めた[大久保 1987:345-346]。白根は、自由党との妥協は副島の発意と考えていたのであろう。

第三議會終了後、井上毅は新聞に掲載された「民党へ交際ある一書生の書面」に対し、「又々如例白根の所為にして内閣は預知らず、副島の失策にて他人は預らず抔云ふ如き小兒を欺く如き顔付きにてすます積と見へ候とも、政府の威信は遂に墜落し、遂に雖有智者不可善其後に至る事目前に有之、氣の毒の至りに候」と松方内閣の内情を嘆いている[伊藤 1973:439]。

結局、黒幕内閣とまで揶揄された不安定な松方内閣が第三議會を乗り切るためには、副島が犠牲にならざるを得なかったのである。

3-3. 「蒼海政談」

25年8月、松方内閣の崩壊を受けて、第二次伊藤内閣が成立した。それから約1月後、新聞紙上に「蒼海政談」と題する副島の談話が掲載された²⁵⁾。副島の内相在職期間はわずか3ヶ月で、その殆どの時間が議会对策に費やされたため、政策論を展開する暇はなかった。以下、「蒼海政談」を手がかりとして当時副島が抱いていた政治的主張を考察してみたい。

まず副島は、「新内閣は前内閣に比し大に為政の容易なる機会に遭遇せりと信ず」と新内閣に期待を寄せ、その一要因として民党の動向に言及している。

選挙干渉後の第三議會においては、民党は「行掛上徹頭徹尾前内閣に反対せざるを得」なかった。そのため、地租軽減、海軍拡張費等政府提出の予算は悉く削減された。「彼等民党は今にして大に地方民心の消極的政治に倦めるを悟」ったが、松方内閣下では民党が方針転換を図るきっかけが得られなかった。政権が変わった今こそ民党も積極政策に転じる好機会であるとしている。

新内閣は此好機会に遭遇するを得たり、故に新内閣は本年の議會に於ても亦次の議會に於ても必ず勝利を得るなるべし、思ふに三年の間は必ず昇平無事なるを得ん、而後民党或は新事業の計画を以て大に政府に当らんとするの期あるべしと雖も、其機会に於て政府が巧に敵を外し得ば内閣は更に持続するを得ん、新内閣或は内訌に破れんと云ふものあり、或は之れあらん、然れども多少の内輪もめ或は多少の破壊はあるとも内閣猶継続するなるべし、或は地價修

正地租軽減の問題につき議会与内閣との衝突は到底免るべからずと云ふ、或は之あらん、然れども此両案は貴族院に於て到底通過の見込無し、決して為めに非常の衝突を来すに及ばざらん、或いは曰く両案もし貴族院の沮む処とならば監獄費国庫支弁案の如きは到底通過せざるべしと、或は之あらん、然れども同案の如きは必ずしも提出するを要せざるべし、人民自ら地方税の負担に甘ずと云ふ政府は強て国庫支弁を主張するにも及ばるなり、予は新内閣が特に此案を以て議會解散の一理とせし如き前内閣の為を復びせざらんことを希望す

これまで論じてきたように、松方内閣崩壊の最大の要因は内輪もめであった。にもかかわらず、新内閣に対しては、多少の内輪もめや破壊があったとしても、なお継続するであろうと語っている。新内閣はその顔ぶれから元勲内閣と称された。副島の予測は、その布陣に起因しているのであろう。さらに、個々の政策への見通しも示しているが、その真意は徒に民党と対立することによって国政の停滞を招くべからず、と論じているのではないだろうか。

而して予は新内閣が此費を転じて大に海軍拡張航路開闢等の途に費さんことを望む、夫れ鉄道の利は即ち利なり、然れども彼は以て内地の交通を便し内地の産物交換を利すべきのみ、遠く航路を拡張し海上の労力を強大にし一は以て貿易の権力を強し、一は以て海軍の実力を強くするに及ばざるを信ず、思ふに航海の権力を握り以て我貿易に従事せば其我国を利するもの尙に關稅回復の利にもあらざるべし、以て海軍拡張の実挙らん、其方法盛に郵船会社を保護し彼をして大に海外の航路を拡張せしむるにあり、予豈虚弁を好まんや云々

航路、鉄道の拡張を図るといった政策は経済効果を齎し、国を富ませる。国が富むことは、条約改正に繋がるだけでなく、軍事力を増強させるのだとし、その方策として郵船会社の保護による航路拡張を挙げている。

内相就任直後の取材において、「余は内閣員の一人として例の條約改正の問題に付ては兼ての持論の如く機を失せずに着手せんことを希望するものなり、此の問題は國家重要な事に関するものなれば内閣にて考定したる上に愈々進行せんとするに、先づ樞密院の審議に附し政府内は勿論のこと同院にても将来異論を生ぜざる迄に事を鄭重にせんことを望むものなり」と語った²⁹。22年の大隈条約改正交渉には反対の立場を執ったが、問題は条約改正に伴う条件、そして交渉の進め方にあった。副島は条約改正を熱望していた。そのためには、経済、軍備両面拡充の必要性を強く認識していたのであろう。

「蒼海政談」は、政府対民党という内的な構図で政局を捉えるのではなく、国家として共に外憂に対峙しようとする副島の信条が如実に表現されていると言えるのではないだろうか。

おわりに

内相就任後間もなく、官邸に訪ね施政方針を問うた者があった。副島の坐後には朱熹の作である「独抱瑶琴過玉谿，琅然清夜風明時，只今已是無心久，却怕山前荷蕢知」の一幅が掛けられていた。顧みた副島は、その第三句を指して「余も亦『只今已是無心久』なり、只た此無心、内務大臣となりし所以なり」と答えたという³⁰。

内相就任のみならず、内相辞任の所以もまた「只た此無心」にあったのではないだろうか。

さて、本稿においては、明治25年の副島の内務大臣就任をめぐる背景と、当時副島が描いた政治的主張を考察することを試みた。明らかとなったのは次の点である。

第一に、副島が内相候補に浮上した背景には、前年の樞密院副議長への就任が大きく作用

していた。議長である伊藤の東京不在により、枢府と内閣の調整は副島が担うこととなった。これにより、副島と松方内閣は親密度を増していったのである。

また、第二回総選挙において、副島が佐賀の吏党候補に選挙資金を用立てる意思があったことを史料により明らかにした。前述したように、第二回総選挙における副島の言動の考察は今後の課題であるが、本稿を通して、佐賀の政党史と中央政界の動きを連動させることが、有益な手段であることを示した。

第二に、副島の政治姿勢が常に「公平」であったことを明らかにした。反対の為の反対を論ずる民党の姿勢を「代議制度の進行階梯」と浩嘆する一方で、官民間双方胸襟を開くことで混迷する議会運営を乗り切ろうとしたのである。しかしこうした副島の態度は、時に民党への迎合と誤解され、政府内部からも反発を招く結果となった。

第三に、副島の辞職は松方内閣の議会運営上の問題から生じたことを検証した。従来、閣議が副島の主張を容れなかったのが、挂冠の意を決したとされてきた[丸山 1936: 305]。確かに最初に辞任を申し出たのは副島であったが、最終的には政府に辞任を要請され、議会運営上の責任を一身に背負わされたのである。

また「蒼海政談」を手がかりとして、副島が当時描いていた政策を示した。

辞職の翌日、副島を越前堀の自宅に訪ねた記者があった²⁸⁾。

例に依り淡白無飾に語りて曰く、我は内務に職を奉ずる時如何にもして今日官民分裂の不幸を避んものと、改進黨員も来れ自由黨員も来れと日々諸君に面会せしが、世間の万事意と違ひ今は閑散の身となれ

り、出づるも別に楽しみとするに足らず、隠るゝも別に悲むに足らず、是よりは閑地にありて大学章句の道を修むるより外なしと笑ふて相逢ひ笑ふて相別れたり

内相を辞職した副島が再び政局の表舞台に登場することはなかった。

[投稿受理日2006. 5. 26/掲載決定日2006. 6. 8]

注

- (1) 副島の履歴は、丸山 [1936], 「副島種臣略年譜」[佐賀県立美術館 2006: 156-157] を参考とした。
- (2) 第一次松方内閣と新聞報道の関係については[佐々木 1983] に詳しい。
- (3) 「明治35年4月16日付、古賀廉造談話」(「談話筆記：下」国立国会図書館憲政資料室蔵『大木喬任文書』69-3)
- (4) 例えば、明治大学博物館所蔵『大木喬任文書』ハ26-36, 37, 38, 77, 93等を参照のこと。
- (5) 明治大学博物館所蔵『大木文書』ハ38
- (6) 「大木副島伯の慷慨」『鎮西日報』25年1月5日号
- (7) 元田永孚は、24年1月22日に逝去している。
- (8) (17) (26) 「副島新大臣の直話」『日本』25年3月13日号
- (9) 「副島内務大臣の対議談話」『朝日新聞』25年3月20日号
- (10) 例えば、[工藤 1910: 143] [林田 1927: 351]。
- (11) (16) 「副島伯板垣伯を訪ふ」『毎日新聞』25年4月10日号
- (12) 例えば、「副島伯大隈伯に面会を求む」『東京朝日新聞』25年4月14日号。「副島伯と大隈伯」『毎日新聞』4月14日号
- (13) 中村純九郎は明治13, 14年頃から副島の門弟であったという[古賀 1976: 9]。
- (14) 「副島伯大隈伯に面会を求めず」『東京朝日新聞』25年4月15日号
- (15) 「三伯会合の説、副島伯の談話」『東京朝日新聞』25年3月26日号
- (16) 「選挙干渉に付副島伯の談話」『東京朝日新聞』25年3月27日号
- (17) 「副島新内務大臣の演説」『日本』25年3月15日

号

- (20) 「副島種臣未だ致死せず」『毎日新聞』25年12月29日号
- (21) 25年6月5日付の伊藤宛伊東書翰は〔伊藤 1974: 213-215〕に2通収録されている (No. 245, 246)。
- (22) 25年6月6日付伊藤博文宛伊東已代治書翰〔伊藤 1974: 215-216〕
- (23) 25年6月7日付伊藤博文宛伊東已代治書翰〔伊藤 1974: 216〕
- (24) 〔伊藤 1974: 213-215〕 No.245
- (25) 「蒼海政談」『鎮西日報』25年9月2日号
- (27) 「意は有無の中に在り」『日本』25年3月20日号
- (28) 「退隱の副島伯」『毎日新聞』25年6月10日号

参考文献

- 石井晋一氏遺稿. 1973「明治25年選挙大干渉と佐賀県(1)」『佐賀史談』5(4). 16-21頁
- 伊藤博文関係文書研究会編. 1973『伊藤博文関係文書. 1』塙書房. 493頁
- . 1974『伊藤博文関係文書. 2』塙書房. 498頁
- 内閣官報局. 1979a『帝国議会衆議院議事速記録 004』東京大学出版会.
- . 1979b『帝国議会貴族院議事速記録004』東京大学出版会.
- 大久保達正監. 松方峰雄他編. 1986『松方正義関係文書. 第7巻』大東文化大学東洋研究所. 672頁
- . 1987『松方正義関係文書. 第8巻』大東文化大学東洋研究所. 565頁
- 尾崎行雄. 1951『罌堂回顧録. 上巻』雄鶏社. 353頁
- 旧肥前史談会編. 1993『佐賀県歴史人名事典』洋学堂書店. 239頁
- 工藤武重. 1910『帝国議会史』有斐閣書房. 672頁
- 古賀廉造. 1976「蒼海先生を憶う」『佐賀史談』8(4). 9-18頁
- 齋藤洋子. 2006a「副島種臣と『天皇親政運動』」『学習院女子大学紀要 Vol. 8』学習院女子大学. 21-37頁
- . 2006b「国会開設勅諭と副島種臣一明治15年の『建言』を手がかりにして」『ソシオサイエンス Vol. 12』早稲田大学大学院社会科学研究所. 186-201頁
- . 2006c「明治16年の副島種臣一九州遊説願いをめぐって」『社学研論集 Vol. 7』早稲田大学大学院社会科学研究所. 123-135頁
- 佐賀市史編さん委員会. 1978『佐賀市史. 第三巻』佐賀市. 874頁
- 佐々木隆. 1983「第一次松方内閣期の新聞操縦問題」『東京大学新聞研究所紀要 Vol. 31』東京大学新聞研究所. 13-158頁
- . 1992『藩閥政府と立憲政治』吉川弘文館. 399+8頁
- 佐々木高行「佐々木高行日記」25年3月19日条, 憲政資料室所蔵「憲政史編纂会収集文書」620
- 渋谷作助. 1934『武富時敏』『武富時敏』刊行会. 263頁
- 春畝公追頌会. 1942『伊藤博文伝 中巻』統正社. 1058頁
- 副島種臣. 2004「蒼海全集」島善高編『副島種臣全集. 1』慧文社. 525頁
- 徳大寺実則「徳大寺実則日記」25年3月10日条, 宮内庁書陵部所蔵
- 日本史籍協会編. 1934『大隈重信関係文書第四』日本史籍協会. 482頁
- 林茂. 1948a「第三議会と第一次松方内閣の瓦解(一)」『国家學會雑誌』62(3・4). 国家學會事務所. 14-37頁
- . 1948b「同上(二)」『同上』62(5). 同上. 23-36頁
- . 1948c「同上(三)」『同上』62(10). 同上. 23-39頁
- . 1948d「同上(四)」『同上』62(11). 同上. 31-51頁
- . 1949「同上(五)」『同上』63(1・2・3). 同上. 79-95頁
- 林田亀太郎. 1927『日本政党史. 上巻』大日本雄弁社. 506頁
- 升味準之助. 1966『日本政党史論. 第2巻』東京大学出版会. 486頁
- 丸山幹治. 1936『副島種臣伯』大日社. 358頁
- 元田竹彦・海後宗臣編. 1969『元田永孚文書. 第1巻』元田文書研究会. 360頁